

氏名(本籍)	しみず ともこ (岡山県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第2476号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	〈記憶〉と〈表象〉の政治学 —1980年代英国の文化と文学—		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授	博士(文学)	阿部軍治
副査	筑波大学教授		井上修一
副査	筑波大学助教授		宮本陽一郎
副査	九州大学助教授	Ph. D. Sociology	毛利嘉孝

## 論文の内容の要旨

本論文は、〈記憶〉と〈表象〉を鍵語として、1980年代の文学を含む英国文化を分析し、その時代の英国を〈記憶〉しく〈表象〉した文化とは何であったか、その解明をめざしたものである。本論文の構成は、以下のとおりである。

### 序章

#### 第1部 1980年代英国の文化を語る枠組み

##### 第1章 法・暴力・物語

##### 第2章 文化を語る〈知〉の系譜

#### 第2部 グローバル化と文化の地政学

##### 第3章 1980年代英国の文学空間

##### 第4章 文化〈翻訳〉の可能性 — 時間性への問い

#### 第3部 〈視〉の制度と文化的実践のゆくえ

##### 第5章 ポリーシングテクノロジーと抵抗 — 福祉国家や監獄か

##### 第6章 身体のごわめき — ユニオンジャックに介入する黒の政治学

##### 第7章 帝国の記憶と戦争の記憶

### 結章

#### 付録1, 2

#### 引用参考文献

#### 初出一覧

第1部では、1980年代英国の文化を語る枠組みとして、どのようなものがあるかが追求されている。

1987～1988年にかけて成立した「地方自治法第28項」は、ホモセクシュアリティの促進を促す出版物の禁止にかかわるものであるが、第1章では、その成立過程でなされた一連の議論が分析され、伝統的な〈家族〉の概念

を規定してきた言説の体制が揺らいだことが示されている。この分析過程で、1980年代英国における文化と国家権力の関係が明らかにされ、従来の諸概念の規定は、国家権力の介入と個人の遂行的行為との不断の交渉によって決定されるとし、また、この時期の文化の考察には社会を階層的な統一体としてではなく、諸勢力の言説による編成体としてとらえることが重要であるとの立場が表明されている。第2章では、1980年代以前、英国の文化はどのように語られたか、とりわけ、戦後英国に登場してきた、アメリカ化と若者のサブカルチャー（テディ・ボーイ現象）をめぐる言説の分析をかいして、文化をめぐる言説の形成機構が解明され、文化とは、不断の変化の動態、複雑な混濁体であり、常に展開される陣地戦のなかで生み出されるものとされている。

第2部では、グローバル化状況と連動した文化がどのような地政学的な動きをし、その際、どのようなポリティクスが作動しているかが追求されている。

1980年代に、急激に国民的関心をひきつけるようになったブッカー賞の分析をかいし、1980年代の文学制度がいに構築されていたかを解明している第3章は、ポスト・コロニアリズムが台頭し、混濁的なグローバル化状況が顕著となった1980年代英国で、〈イングリッシュネス〉を中核とした国民文化は揺らぎ、新たな脱国家的・脱領域的な文化的創造空間が現出したとしている。第4章では、冷戦体制の崩壊やグローバル化状況の進展にともない、〈中国人〉をめぐる言説が大きく変容したことが論じられ、1980年代英国文化の特徴となっている〈移された（転位された）人々〉（ディアスポラ）の事例を分析することで、〈ディアスポラ〉的实践としての文化〈翻訳〉の可能性が追求されている。

第3部では、視覚とその分節化機構に国家権力がどのように介入したかが追求され、それによって1980年代英国文化の空間の特徴が解明されている。

冷戦体制や福祉国家システムの解体とともに、国家に抵抗する労働者階級と若者層がどのような文化空間を創出したかを追求する第5章では、文化と視覚装置をかいして社会に浸透していった言説によって、ある文化的力学と文化的抵抗が生じたことが示され、監視システムのなかで、既存の生産と労働の關係に抵抗していく文化空間が創出されつつあるとしている。第5章で扱われた文化的抵抗とは異質の抵抗を扱う第6章では、移民や黒人と呼ばれていた若者たちが、〈黒人〉（ブラック）ということばのもつ否定的な意味内容を逆手に取り、どのように自らを連帯させ自己のアイデンティティを構築していったかが分析されている。具体的には、地方都市バーミンガムに起こったドキュメンタリー写真を中核とする文化活動が、人種とセクシュアリティの視点から分析され、この運動が脱国家的展開をみせ、従来、西欧によって〈他者〉化されていたものを複数の位相からの提示することにより、新たな知の生産を行ったとしている。第7章では、現代英国を代表する写真家ポール・グレアムの写真集『空っぽの天国』を中心に、1980年代後半以降、にわかに顕在化した〈日本人〉表象や〈日本人〉言説が、〈英国人〉のアイデンティティとどのようにかかわっているのが解明され、それは多文化主義の仮面をかぶった人種主義が作動している社会にある、忘却することのできない帝国の記憶と直面する英国の姿そのものであったとしている。

結章では、第1章から第7章までの追求が総括され、本論文の研究姿勢と意義とが明確化されている。つまり、「学問研究という特殊領域から日常生活空間へと〈翻訳〉するのではなく、反対に、その生活空間を研究領域へ〈翻訳〉」することであり、〈イングリッシュネス〉を核にした言語編成ではない文化を語る枠組みの提示にあったという。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、近年、活況を呈しているカルチュラル・スタディーズを理論的・記述的パラダイムとし、英国の1980年代の文学・文化の状況のひとつの在り方を提示した画期的な論考であり、日本はもとより欧米でも、いまだ類似の研究はみられない先駆的な試みと評価できる。

本論文の学界への貢献は、以下の3点にまとめることができる。

その第1は、従来の文学研究では決して使用されることがない資料が発掘・使用されていること。とりわけ、法律分野、大衆社会分野、そして写真メディア分野などのものが印象的である。

第2は、従来の文学研究の視野には、決して入ることのない社会・文化・政治現象が取り上げられ、それが文学や文化と接木されていること。

第3は、社会学系列が実践しているカルチュラル・スタディーズ領域に対して、文学からの情報を提供し、今後のカルチュラル・スタディーズそのものの進展に対して新たな知見を加えたこと。

本論文は、伝統的な文学研究と1980年代の政治・文化・社会状況とを接合し、さらに、ポスト・コロニアル論、ジェンダー論、階級論によって分析し、あるひとつの時代状況像を提示する著作として、今後、この種の研究のモデルとなるものではあるが、若干の問題も残されている。第1は、使用している概念や用語が、やや不正確で曖昧であること。第2は、状況の提示と分析と記述において、やや論理性に欠けるところが見られること。第3は、文学テキストの分析が少なく、とりあげられたテキストの理解が型どおりにすぎるところがあること。

これらの課題が残されてはいるものの、大胆な発想、大きな視野、そして新しい知見の提示、新しい資料の使用などを特徴とした本論文は、1980年代英国の文化のひとつの姿を提示しようとした学位論文として十分に価値のあるものである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。